



外来・中央診療棟エスカレーター(1階)  
輸送能力向上のため、新規設置された  
エスカレーター。同病院の「外来の顔」  
としての役割も担う。1階から2階に昇る  
途中、ガラス越しに外の景色を楽しむこと  
ができる。

ユーザー訪問

乗り心地、  
いかがですか？



公共施設や駅、病院やデパートなど、  
北から南まで街の様々な場所で  
エレベーターは活躍しています。  
ここでは、東芝エレベータのユーザー  
さまをご紹介します。



井川 幹夫氏  
国立大学法人島根大学  
医学部附属病院長  
理事（医療担当）

導入事例

vol.4

国立大学法人  
島根大学  
医学部附属病院

## 地域医療と先進医療が調和する大学病院

1979年に開院した島根大学医学部附属病院は、5年にわたる再開発を経て、2013年4月、最新設備を備える総合病院にリニューアルした。新病棟の建設と、既存病棟2棟、外来・中央診療棟の全面改修を行い、地域医療と先進医療の担い手として充実を図るとともに、大規模災害時にも対応できる環境を整えた。外来・中央診療棟にエスカレーターを新設するなど、患者中心の全人的医療の実践を目指す同病院長の井川幹夫氏に、再開発事業の狙いや思いなどを伺った。

### 5年をかけて 病院をリニューアル

出雲大社は今年、60年に一度の大遷宮に伴う御修造が行われたが、そのお膝元にある島根大学医学部附属病院も5年の歳月をかけ、今年、大規模再開発事業を完遂した。

同病院は1979年に島根医科大学附属病院として設置されたが、80〜81年にかけて病床の増床が行われ、616床の大型総合病院となった。それから約30年経ち、設備の老朽化が進んだため、2008年度に新病棟（C病棟）建設に着手。その後、既存のA・B病棟と外来・中央診療棟（以下、外来棟）の大改修を終え、今年4月、

病床600床と最新設備を有する病院としてリニューアルオープンした。

同病院長の井川幹夫氏は、再開発事業の狙いについて次のように語る。

「開院して30年以上経ち、大学病院に求められる役割が変わってきました。我々は地域の医療を支えるとともに、首都圏の大病院にも引けを取らない世界水準の先進医療を患者さんに提供する必要があります。つまり、地域医療と先進医療の調和が大切です」

### 先進的がん治療や 手術支援ロボットも

同病院はリニューアルによ



って、救急医療および急性期医療の充実、各種治療を組み合わせた集学的がん治療の推進、高度医療の確立と普及、教育・研究環境の向上、快適な療養環境の提供などを目指している。また、大規模災害にも対応できるように、C病棟には免震構造を導入し、自家発電装置や地下水くみ上げポンプなども完備した。

C病棟について見てみると、ICU（集中治療室）14床と救命救急センター病床16床を配置している。救命救急センター専従医師も増員して、あらゆる救急患者を受け入れる体制を整備した。また、国立大学病院では2番目となる緩和ケア病棟を5階に設置し、がん治療の初期段階から緩和ケア段階までをカバーした。8階には腫瘍センター病棟も新設し、先進的な抗がん剤治療を推進するために、空気清浄度の高い病室環境を整備した。遠隔操作で体腔鏡下手術を実施できる手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入も、リニューアルの目玉のひとつである。「ダ・ヴィンチ」は、健康保険適用となる前立腺がん治療に活用されているほか、保険適用ではないものの、病院側の負担で腎臓の部分切除術、膀胱の全摘除術を行い、今後、子宮や胃の手術にも使

われる予定である。同病院は患者中心の全人的医療の実践を目標に掲げ、首都圏と変わる先進医療を絶えず導入する努力を続けてきたのである。

**地域のリーダーとなる  
総合診療医を育成**

同病院は、大学病院として教育・研究環境の充実も重視している。例えば、今回のリニューアルでは、シミュレーターを使った研修が可能な内視鏡手術トレーニングセンターや、医療技術の向上を目的としたクリニカルスキルアップセンターなどを、教育エリアにまとめて整備した。

研究・臨床能力が高く、地域でリーダーシップを発揮できる総合診療医を育成するために、他県の大学病院との連携を推進している。また、2011年には地域の行政や医療機関、医師会などと連携して、地域医療に貢献できる医師のキャリア形成を支援するしまね地域医療支援センターも設置した。

「現在、兵庫県の大学病院などと連携しながら、高齢化社会に対応した地域医療のあり方を研究し、医療・介護・福祉を横断して高齢者ケアを推進できる総合診療医の育成を図っています。今後、当病

院が中心となって地域の介護事業者・福祉団体などとコンソーシアムをつくり、お互いに学び合いたいと考えています」と井川氏は語る。

### ホテルのように 患者を迎え入れたい

同病院ではリニューアルにあたり、快適な療養環境の提供も重点項目のひとつに掲げていた。そのため、従来6床だった多床室を4床に減らし、個室の数を増やした。また、すべての病室にテレビ、冷蔵庫、ソファアベッドなどを導入し、インターネットも利用できるようにした。

外来棟には、患者のサポートを行う女性の「外来コンシェルジュ」を2名配置した。井川氏は、ハードだけでなく、スタッフの対応などソフト面の充実も重視しているからだ。また、これまで中庭だったスペースを改築してエスカレーターを4台導入し、1階にはコンビニも誘致した。

「ホテルのように患者さんをお迎えしたいと思って、外来棟にエスカレーターを新設しました。患者さんの評判はいいですよ。職員も皆、便利になったと喜んでいます」と井川氏は語る。

### リニューアルで 快適なエレベーターに

外来棟では既設のエレベーターも改修の対象になった。外来棟にはもともと、待合ホールに面した位置に2台、少し奥まった位置に3台のエレベーターがあった。しかし、導入時期が古く、運転効率が悪かったため、職員の出勤時には待ち時間が長くなり、看護師のロッカー室の前で人が

あふれる状態だったという。また、設置年数が長くなるにつれ段差の発生などの問題も生じていた。財務部施設整備課長の井上修一氏は次のように語る。

「段差や着床時のショックが大きくなり、乗り場とかご室の間の隙間も広がって名札や鍵を落とすなどのトラブルがありました。患者さんが転倒する恐れもあったので、リニューアルは必須でした」



井上修一氏  
国立大学法人島根大学  
財務部施設整備課長

実は井川氏は、身をもってエレベーターの段差の危なさを感じていた。自ら足首を骨折して入院した際、エレベーターの段差はストレッチャー



外来・中央診療棟のエレベーター乗り場(1階)  
外来・中央診療棟に玄関から入ると、広々とした待合ホールがある。今回、リニューアルされたエレベーターのうち、2台はこのホールに面した位置に設置されており、主に外来患者に利用されている。



### 国立大学法人島根大学 医学部附属病院

島根大学医学部附属病院は、病床数600床、年間入院患者数延べ14万5161人、外来患者数延べ22万7990人(2012年度)の規模を誇る総合病院で、職員数は計1168人に達する。

2008年度から始まった再開発事業は総事業費200億円を投じた大プロジェクトだ。新設されたC病棟は9階建ての免震構造で、敷地全体で大規模災害に備えている。

3日以上自家発電が可能な設備や、最大で1日43万ℓ使用可能な地下水くみ上げポンプを備える。さらに、立体駐車場は3000名以上収容可能な避難所に転用可能で、応急手当やドライブスルー方式の外来診療もできる。

DATA



みらい棟のエレベーター乗り場(2階)

外来・中央診療棟に隣接するみらい棟には、しまね地域医療支援センターが入居している。エレベーターのドアには、エッチング加工により美しい模様が施されており、かご室壁面の化粧鋼板には淡いピンクで桜の花柄模様があしらわれている。



▲ドアの拡大図



▲かご室壁面の拡大図

搬送中の患者に予想以上の衝撃を与えることわかったのだ。「患者さんが点滴台を押しながら歩く時に段差に引っかかりやすいし、お年寄りはずり足で歩くので転倒の可能性が高まります。もちろん、災害対策の一環としても最新機種にリニューアルする必要があるありました」

こうしてこの5台のエレベーターは真つ先にリニューアルの対象となるが、現場で利用中のエレベーターであったため、リニューアル工事は慎重に進められた。再開発事業に担当として長らく携わってきた財務部施設整備課の吉田泰樹氏は工事中の苦労についてこう語る。

「現場からは、5台のエレベーターをなるべく早くリニューアルしてくれといわれていました。しかし、患者さんがいるので一度に停止するわけにはいきません。そこで、東芝エレベータと相談しながら、リニューアルの順番を決め、スケジュールを立てていきました。結果、予定より早く完了して助かりました。とはいえ、この間、工事の着手時期やスケジュールの病院内への通知には気を遣い、張り紙や文書の配布を通して周知徹底しました。今では待合ホールのエレベーター2台が連動して動くようになったので、待ち時間が格段に短くなりました」

5年の歳月を費やして新しく生まれ変わった同病院。今後、島根県において、地域医療と先進医療の核として機能することは間違いのない。

メーカーの立場から

患者や職員のことを最優先に考えて、工事の進捗を管理



大場 勝則  
東芝エレベータ  
中国支社 建設グループ  
技術主任

現場に1年半常駐  
ゼネコンと協力関係

島根大学医学部附属病院の再開発事業でエレベーター、エスカレーターに関わる工事の管理を一手に引き受けた東芝エレベータ中国支社の大場勝則は「1年半にわたる長丁場で困難はありましたが、自信ができました」と語る。中国支社は広島市内にあるため、大場は出雲市内にアパートを借り、2011年10月から1年半、現場に常駐した。東芝エレベータは、再開発事業関連で、新設エスカレーターを4台、リニ

ューアルのエレベーターを9台、新設エレベーターを3台受注した。これだけ台数が多いと、工事の順番と段取りを調整するために、施工および建設を担当するゼネコンと綿密な打ち合わせが必要になる。また、リニューアル工事も併う場合、ゼネコンと協力関係を築かなければ工事はスムーズに進まない。大場は、ゼネコン担当者とは良好な関係を構築するのに注力したという。

期間のスピードも要求されてきました。時には昼夜2交替で進めましたが、私1人ですべて管理していたので、プレッシャーは常にありましたね」

「2人で作業に入り、1台ずつ工事しましたが、リニューアルの台数が多いので、順番を決めるのが大変でした。同時に工事

1人で4人分の活躍が自信に

病院では絶えず人の出入りがあるため、安全性には最も気を配った。例えば、資材の搬入・搬出は人が少ない土日か、早朝あるいは夜間に行い、エレベーター前の作業スペースも必要最小限に絞り込んだという。また、病棟のエレベーターリニ

ューアル工事では騒音に留意し、入院患者の就寝の妨げにならないよう夜8時には工事を終わらせるようにした。通常、工事を準備する工務と現場を管理する工事は別の人間が担当し、リニューアルと新設も別々に対応するのが一般的である。本来なら前述の複数の担当者が対応する案件だが、会社側は大場の力量を評価していたため業務は大場1人で担った。目が回るような毎日となった1年半であったが、大場は無事終わらせることで、大きな自信となったようだ。